

## エジプト文明を掘る（1） —早稲田大学とエジプトとの出会い—

吉村 作治

早稲田大学古代エジプト調査室がエジプトについて調査を始めてはや27年が経った。正確には調査室ができたのは1976年であり、第1次発掘調査は1971年である。1966年のゼネラルサーベイは、故川村喜一教授と私を含めた5名の学生によって行なわれたのである。そしてこのゼネラルサーベイが今日の早稲田大学のエジプトにおける発掘調査の原点である。

このコラムを今後数回にわたって書くにあたり、まず最初に私たち早稲田大学の古代エジプト調査について簡単にふれておこうと考えたのは、私にとってのエジプトは大学のエジプト調査と切っても切れないからである。当時外国で考古学的調査を行っていたのは、東京大学のイラン・イラク調査と京都大学のアフガニスタン調査だけであった。私立大学が海外調査を行なうことはほとんど不可能とされていた中で、故川村喜一教授（当時文学部講師）と私はまず予備調査だけでもと思い、1966年9月タンカーに乗ってエジプトに渡ったのである。2度にわたってアレキサンドリアからアブシンベルに至るナイル川周辺の遺跡の踏査を行なった。当時の研究テーマは、「エジプト文明の起源—王朝成立期の諸様相—」というものであったから、観光客が全く行かない所にジープで入り込んでの調査であった。故川村先生と私は2つの課題をもっていた。エジプトにはまだ発掘する余地があるかというのと、私たち日本人が発掘できるかというものであった。当時エジプトの遺跡管理権はフランス人の手からエジプト人の手に移っていたとは言え、欧米の影響は大きく、

特にアスワンハイダム建設の際、水没するヌビア地方の緊急発掘に日本は人的貢献を行なっていないため、今さら何が発掘だという感情がエジプト考古庁（E.A.O.）にあったから、はたして私たち早稲田大学が発掘をしたいと言ったからと言って簡単にE.O.A.はOKを出してくれるかどうかはわからなかったからである。予想通り、ゼネラルサーベイの時の感触は難しいというものであった。そのため私は、翌1967年日本に帰国してからひとり渡エシ、カイロ大学に留学するとともに、その交渉にあたった。エジプト政府のOKがないことには、文部省の科学研究費海外学術調査費の申請を行うこともできないし、早稲田大学の校友に援助要請もできないからである。故川村先生は日本において、将来エジプト調査実現を確信し資料収集や調査隊編成の準備をし、私はカイロ大学に通うかたわら連日のようにE.A.O.に通い発掘許可の打診を行った。この時期が私の27年のエジプトとの関係の中で一番不安であり、一方期待に胸ふくらんでいたと言えよう。今のように電話やファックスなんて日本とエジプトの間にはつながることはなかったため、1年に1回、故川村先生は自費をはたいて、エジプトにやってくる私と連絡を取りながら作戦を練った。今でも忘れられないナイル川のほとりの「カジノ・ド・ハンマーム（鳩料理の店）」での話し合いである。3年後の1969年ついにエジプト中部デルエル・ベルシャという先王朝から中王国時代までの遺跡の発掘許可がおりた。これには当時のE.A.O.長官ガマル・エルにティン・モクター博士の尽力が大であった。

「東洋にエジプト学を」が同博士の夢だったとのことで私たちに好意的だったのである。しかしその後すぐにエジプトは対イスラエル戦に備えアスワン、ルクソール、カイロ、アレキサンドリアの4観光都市以外への外国人の訪問を禁止してしまい、私たちの許可も当然キャンセルされてしまった。悲劇的に私たちの計画は終わってしまうのかと思われたが、モクタル博士の取り計らいでルクソールにて再度候補地を探してよいとの言葉で、ついに見つけたのがマルカタ南である。この地は、新王国時代中期のアメンヘテプ3世の王宮マルカタの南の砂漠と耕作地のへりのところで、ローマ時代に建てられたイシス神殿がぽつんと建っている所であった。とても遺跡があるとは思えなかったが、その他の地区は全て欧米の調査隊によって区分けがすんでおり、とても入り込む余地がなかったのである。「ともかくここで頑張ろう」と故川村先生と誓い合って発掘を開始したのが1971年の春だった。そして1973年にはアメンヘテプ3世時代の彩殿を発見し、それが契機となって今日まで続いているのだ。その間1979年には隊長であった川村喜一教授が亡くなってしまい、一時は主を失った江戸時代の小藩のように取り潰されそうになったが、なんとかかろうじて続行できたのは大学当局や故川村先生の先輩方のおかげであった。ともかく1978年にルクソールにワセダハウスを建設することができ、形だけは、欧米の調

査隊のようになった私たち調査隊は、日本においても早稲田大学の中に、研究調査室ができ、どうやらエジプトの考古学的な調査研究ができるようになったのである。調査室の当初の主な仕事は、故川村喜一教授が行ったマルカタ南遺跡の発掘報告書であった。現在、5巻のうち4巻までが刊行され、最後の1巻も1994年度末までには刊行できる予定となっている。その間マルカタ南、魚の丘遺跡（アメンヘテプ3世祭殿）出土の彩画片の分析研究と建築史学的研究により、その後も研究を行っており、同遺跡の復元を近い将来、行なおうと考えている。それと関連し、ルクソール西岸クルナ村に点在する新王国時代を中心とした貴族墓の墓内壁面の比較調査、そこから派生したミイラおよび人骨の研究、そして王家の西谷におけるアメンヘテプ3世王墓の発掘調査とつながっており、そのメインテーマは、「アメンヘテプ3世」である。

一方、1987年E.A.O.の要請で始められたピラミッド内部のハイテク機器による空間探査で始まったピラミッド調査は、アブシール南の丘陵部に新王国時代19王朝の葬祭殿の発見、大ピラミッド南側に第2の太陽の船ピットの発見と続いている。現在少々私たちは力以上の調査を余儀なくさせられているというのが、本当のところであるが、やり抜くしかないのである。

（よしむら さくじ

早稲田大学古代エジプト調査室）